

朝のこない夜はない

こころ
心の垢を取り

さんとく
三徳の修養に

はげ
励みましよう

山首 鈴木正修

心の洗濯

心の制御

村上先生の御法話集・第一巻に『心の洗濯』

というお話があります。少し読んでみます。

「大昔は心のことをコロコロと言ったそうですが、語調が悪いので中間の口の字を抜いて現在の『こころ』としたものだそうがあります。

お互いに持っている心は、手に取って見るとは出来ません。見ることが出来なければ無いかと思えば、種々様々のことを思っている、それが心であります。その心は、事に付け、折に触れ、その触れるものの善悪を問わず、その触れたる物に誘われてコロコロと働くのでありま

す。いわゆる朱に交われれば赤くなるの譬もそれから出て来ます。古歌にも『こころこそころまよわす ころるなれ ころるにころる ころゆるすな』とあります。また王陽明は『山中の賊を平らぐるは易し。心中の賊を平らぐるは難し』と言っておりまして、全く油断のならぬものは心であります。

この心が善に働けば、わが身は現在も未来も幸福を得、安楽を得るのであります。これに反して悪に染まって働いたならば、実にこの身を永遠の苦しみに導くのであります。故に何人も常に心を正しうして事に処することが肝要であ

ります」

心こころというものはコロコロと動くもので、お釈迦しやくかさまも制御せいぎよすることのむつかしさを馬うまや猿さるに例たとえられ、「心こころを主しゆとせざれ。心こころの主しゆとなれ」と言いわれました。心こころが動うごくことによつて欲望よくぼうが生しょうじ、その欲望よくぼうに肉にく体が動うごかされていいことにならぬのです。身近みぢかなところで言いいますと、酒さけ・ギャンブル・煙草たばこなどを簡単かんたんに止やめることが出来できないことが一例れいです。ですから、仏道ぶつどう修行しゆぎやうの根本こんぽんは心こころを制御せいぎよすることが何なにより大事だいじだと言いわれるのです。

続つづけて村上先生むらかみせんせいは「宗教しんじゆうの信仰しんじゆうと言いうも、ただこの一つの心こころを正ただしくするをもつて目的もくてきとする」とおっしゃっています。信仰しんじゆうは心こころを正ただしくする、つまり、心こころを磨みがき、修養しゆじやうすることが根本こんぽん

の目的もくてきであるということです。

村上先生むらかみせんせいは杉山先生すぎやませんせいの門もんに入はいられて、修養生しゆじやうせい活かつを始めはじめられました。そして、法華經ほけきやうの奥義おうぎが知しりたいと、杉山先生すぎやませんせいと共に断食だんじき・水行すいじやうなどの修行しゆぎやうを三年間ねんかんされました。今の私いまに近いお年としだつたと思おもいます。当時のこととうじを「県下知多郡阿久比村臥竜山けんかちた郡阿久比村臥竜山において一か年半ねんはん、引き続つづいて西加茂郡藤岡村柿野の山奥やまおくにて一か年半ねんはん、都合三年苦行ねんくきやうを致いたしました。ある日ひのこと、誰言だれいう者ものもなきに私わたしの耳みみに『汝なほはすでに満三年間水行まんねんかんすいじやうを成なせり。この三年間ねんかんの水行すいじやうに依よりていかなる効果こうかがあつたか。いかなる悟さとりが出来できたか今日けふ限りやめるがよからう』と聞きこえました。この言葉ことばを聞きいて考かんがへるに、私わたしは三年間ねんかん一度も湯ゆに入はいらず水行すいじやうに精進しじゆじんしたが、なるほど諸天善神しよてんぜんじんの

仰せの如く、何の得るところもなかったのです。

そこでさらに悟りを開かんと沈思黙考したので

ありましたが、その時また声があつて『汝は棺

桶を作つてその中に入つて考えよ。しかし、棺

桶に入つたら世の人は汝を狂人と言うであろう。

棺桶に入つたつもりで押し入れに入つて考えよ。

水行するのは魚のまね。魚は水の中に住みて水

を離るれば死するのだ』と聞こえました。この

言葉を聞いて水行はぶつくり止めてしまいました

た。そうして、諸天の仰せの如く、棺桶に入つ

たつもりで考えました。かくして数日を経て、

悟りました」と言われています。

悟りの内容は「今のこの人間である境涯を喜

び、感謝し、人に慈しみの心を以て善根功德を

積むことが法華経の真理である」ということで

す。

——バラモンの修行——

これは原始仏典に出てくるお話です。お釈迦

さまも水行・断食などの苦行を六年間されまし

たが、悟りを開かれた後は、苦行を一切否定さ

れました。それでも当時のバラモンと呼ばれる

修行者たちはいろいろな行をしていました。そ

の一つに、ガンジス河での沐浴があります。

ある時、一人のバラモンが寒さに震えながら

ガンジス河で沐浴をしていると、そこに女性出

家者のブンニカーニが通りかかり、問い掛けま

した。

「何をしたいらっしゃるのですか？」

「わかっているくせにあなたはそのことを尋

ねる。沐浴することによって過去世の悪業を洗い流しているのだ」とバラモンが答えるとプリンカー尼は次のように批判しました。

「魚や亀やワニやカエルは生涯、水につきりっぱなしです。と言うことは、それらの生き物は我々より解脱しているはずですね。それなのに、畜生として人間より低く見られているのはなぜでしょうか。あるいは、水には何が善業で、何が悪業かを判断する能力があるのでしょうか。どうぞお風邪をひかないように頑張ってください」と声をかけて去ろうとすると、それを聞いてバラモンは悟り「私もあなたの師匠のところへ連れて行ってくれ」と言つて仏教に帰依したということです。

またバラモン教には「ホーム」（護摩）とい

う火を焚く儀式がありました。これもお釈迦さまは迷信として否定されました。火の中に動物を生贄として入れたり、牛乳やバターを入れたり、穀物などいろいろなものを入れて焼くのです。その煙が天上に上つて行くと神様の所へ届き、供養になると信じられていました。それに対してお釈迦さまは、そんな殺生はするものではないと戒められたのです。

もう一つ、バラモンは火を焚くことによって、過去世からの穢れや罪障が消滅されると信じていました。それに対してお釈迦さまは「火によって穢れがなくなるというのなら、朝から晩まで火を燃やして仕事をしている鍛冶屋さんが一番穢れが少なくて解脱しているはずである。それなのにカースト制度では最下層に位置づけら

れているのはどうしたわけであるか」と批判しておられます。大変道理になつたお言葉です。

—— 迷信を絶つ ——

これ以外にもお釈迦さまは、星占いや姓名判断を否定されています。名前によつて人の運命は決まるものではないという考えです。村上先生も『迷信を絶つ』という御法話（御法話集・第二巻）の中で言われています。

「この頃次に次のように申して来られた方がありました。『姓名判断で調べてもらつて名前を変えました。どうも変えても一向に善き事がなから別の姓名判断に見てもらつたところ、かえつてよろしくないということなので、また変えました。何も変わりません。そこでこの姓

名判断に疑いを生じました。これはどういふものでしょう』とのことでしたが、これも一つの迷信であります。

姓名も、聞いてあまりに悪い感じを抱かされるようなものは、呼びよくて善い感じの名前にするのはよろしいが、単に名前によつて幸福を得たいということは迷信であります」

悪い感じの名前で思い出しましたが、以前、自分の子どもに『悪魔』と付けた人がいました。区役所の方が「こんな名前は受け付けられない」と受け付けなかつたそうです。

神戸支院の田中上人は昔、小学校の先生をしてみえました。その田中上人が「正修上人、昔すごい名前の生徒がいました。『ひろひと君』というのです。昭和天皇と同じ名前ですからび

つくりして、父兄参観の時にその訳を聞いてみたら、お父さんが『子どもに立派な人になってもらいたい』と思い、天皇陛下と同じ名前をつけたそうです。でも、恐れ多いので一画だけ減らしたそうです」と教えて下さったことがあります。

去年もお話したことですが一宮支院の伊藤先生は昔、薫さんという名前でした。村上先生に付けて頂かれた名前ですが、当時、一宮に姓名判断にこつてみえる方がいて、薫という名をその先生の所に持って行ったそうです。すると「この名前は短命だ」と言われました。それではいけないとみんなでもっと長命な名前に変えて頂くのと話していたところ、慈学上人が来られました。そこで「もっと長命な名前に変

えて頂けるように村上先生にお願いしてもらえませんか」と伺ったところ、「それはいかな。村上先生にお願いしよう。短命な名前はいけなから、絶対に死なない名前を付けて頂く」と言われたそうです。そこで皆さん、名前にこだわってはいけません。村上先生に付けて頂いた名前を尊く頂かないといけません」と悟ったそうです。

村上先生は「迷信」を、お釈迦さまのように徹底して否定されたのです。

六波羅蜜の実行

仏教化救済会の頃は、信者さんが講日に行らっしゃると、その方の六波羅蜜の修養程度を調べたそうです。十日間に六波羅蜜をどれくら

い出来ていたかを点数化したのです。その方法は杉山先生が天眼で洞見されて「あなたは布施が何点だった。堪忍が何点だった」と、その合計点を出し、天上界・声聞界・縁覚界・菩薩界の四段階に分けて教化されたのです。この四つの界の意味ですが、天上界はいいように見えてよくありません。「未だ妙法のありがたきことの判別の暗い人」です。声聞界は「善きこの御法の教訓を一言も聞きもささず聞いて、自分の修養の糧にしたいと一生懸命聴聞している人」で、縁覚界は「飛花落葉を見て、世の無常を感じると言うが如く、悟りの善い人」です。例えば人から悪口を言われても自分の罪障だとすぐに覚って反省する人のことです。菩薩界は「その人の慈悲心はことに深くして、罪障のために

苦しむ人には自己の積みたる功德をも与えて苦しみを抜き、衆と与えんとする慈悲に富む人」であります。

当時のことを知っておられる方に聞いたのですが、菩薩界と言われたいと思つて十日間一生懸命頑張り、期待をして行くと、だいたいの下の方を言われたそうです。ところが「いかなあ。今回はダメだろうな」と思つて行くと、意外に上だったことがあつたそうです。杉山先生はその人の心の内をよく見抜かれていたのです。

村上先生ご自身も毎日、この六波羅蜜を反省しておられたということ。布施に関して「貪るの心はなきや否や。施しの心はいかがであらうか」。持戒に関して「菩薩としてこの娑婆世界に出世したる目的に反する動作は無きや

否や。人を喜ばすことをわが喜びとしているや
否や。忍辱に關して「腹立つことは無きか」。
精進に關して「良き道に進むに当たり、倦怠の
心が起こりはしないか」。禪定に關して「心は
善道に定まりて、決して動くようなことは無い
か」。仏智に關して「事に処して偏頗なく、自
他平等に利益を受ける心はいかに」といったよ
うに毎日、六波羅蜜に關してご自分で心と行な
いを点検されたのです。そして、慈悲の心が欠
けると悪寒がしたり、またご飯が美味しくなく
なったりしたと言われます。持戒の心が欠ける
と、自分の考えたこと、成すことがなかなかう

まくいかなないから、その時は自分の使命と思
心を改めたと言われます。また、堪忍が出來て
いない場合は急に熱が出て顔がぼかぼか温か
なってくるから「ああ、堪忍が欠けているな」
と分かったそうです。このように、体に異常が
現われることを諸天の擁護である、とおっしゃ
つてみます。

村上先生のように日々の行ないを毎日反省し、
心を正しくしていけば、極楽は必ず目の前にあ
らわれて來ます。村上先生を範として日々の心
の垢を取り、三徳の修養に精進して参りましよ
う。